NEXCO東日本がプロデュースする「鬼平・江戸処」の魅力（その壱）

「江戸しぐさ」が町を豊かにする。

おもてなしの心

「江戸しぐさ」という言葉を聞いたことがありますか？文献にはほとんど残っていない口承によって伝えられている江戸時代の「社会的マナー」のことです。この「江戸しぐさ」は、「繁盛しぐさ」とも言われ、「商人の道」を説くものとして、長い間大切にされてきました。

今、「江戸しぐさ」がふたたび注目を集めています。江戸の人々が大切にした「おもてなしの心」が、接客の現場だけでなく、日常生活においても、心地よく過ごすための「大切なヒント」になると、重要視されています。越川さんは、「江戸しぐさ」の「語りべ」として、全国を回り講演や執筆を続け、また、今回の羽生PAのプロジェクトでは、「江戸のコンセプトタウン」で働く現代の商人たちに、接客の哲学を、さまざまなかたちで伝え、指導しています。

越川さんは「江戸しぐさ」の本質をこのように語っています。

「自然や物事を感性豊かに感じられること。思いやりの気持ちを自然なかたちで行動にうつしていく『クセ』。江戸しぐさとは、その人の持つ『センス』のです。たとえば、挨拶。江戸時代では9歳になると『世辞』のひとつぐらいは言えるようにするのが親の務めと言われていました。世辞とは、挨拶から始まる大人の世間話のこと。人はそれぞれ違う価値観を持っています。だから、対応や問題解決にマニュアルなんてありません。ただ、おたがいが心地よくいたいから、ちょっとした思いやりのある言葉を掛け合う。それが基本です。なにも難しいことではありません。これは親のふりをみたり、さまざまな体験をして覚えていく〝人として〟あたりまえのマナーなのです」。

江戸しぐさには、いくつかの象徴的なアクションがあります。雨の日、狭い道ですれ違う際に相手に滴がかからないようにする「傘かしげ」、路地ですれ違う時にぶつからないようにする「肩引き」、乗り合いの舟などで場所を融通し合うための「こぶし腰浮かせ」などが、それです。

「仏さまの前ではみんな平等。場所や時間や、楽しい気持ちさえも分かち合う、そんな〝共生〟の気持ちが人間関係を豊かにし、また、町を豊かにしていきます。挨拶、会釈、立ち振る舞い。江戸しぐさとは、日本人が本来持っているやさしさや思いやりを、言葉や行動などのかたちにしたものです。それは、私たちが忘れてしまっている、日本人の心の故郷そのものではないでしょうか」。

現在、接客スタッフは越川さんの指導のもと、「江戸しぐさ」の習得に向け訓練を積み重ねています。来春お目見えする『鬼平・江戸処』の「おもてなしの心」に、ぜひ、ご期待ください。

越川禮子（こしかわ れいこ）

1926年東京都生まれ。インテリジェンス・サービス社代表取締役社長。「江戸しぐさ語りべの会」主宰。
アメリカの老人問題を取材した『グレイパンサー』が潮賞ノンフィクション部門優秀賞を受賞。
以降、「江戸しぐさ」など、共生をテーマにした取材・研究・執筆・講演活動を行っている。
「江戸しぐさ」に関する著書多数。http://www. int-s.jp/html/edoshigusa.html

来年ふり羽生PAが「江戸の町」をコンセプトに生まれ変わる。
職人さんの実力や有識者の智恵を借り、細部にまでこだわり抜いた町をつくりあげる。
江戸の建物や工芸品、町の喧騒、食べ物。
そして、人々のしぐさや人情。
開発に携わったクリエイターたちがあかす、「鬼平・江戸処」の魅力。
第一回のゲストは、「江戸しぐさ」の第一人者・越川禮子さんです。

傘かしげ、肩引き、こぶし腰浮かせ

小説『鬼平犯科帳』で識る江戸

第一話『火付盗賊改方（ひつけどうぞくあらためかた）』

イラストスペース

言わずとしれた『鬼平犯科帳』の主人公は、長谷川平蔵、通称「鬼平」。火付盗賊改方長官とは彼の肩書きである。明暦の大火（1657年）以降、世情が不安になるにつれ、放火犯や盗賊などの「武装した凶悪犯」が頻出するようになった。そこで幕府は、治安維持のために、文官の町奉行にたいして「武官」機能を持つ「火付盗賊改方」を設置した。「この役目は、町奉行所とは別だが、つまり一種の特別警察のようなもので、江戸市中内外の犯罪を取りしまるばかりか、すこぶる機動性をあたえられているから、いざとなれば自由に他国へも飛んで行き、犯人を捕まえることが出来る。（中略）いえば十蔵（第1話登場の同心・筆者注）は、特別警察の外まわりの刑事か警官のようなものなのである」（『鬼平犯科帳（一）』文春文庫より）架空の長官である鬼平は、経済不安の折、老中・松平定信による寛政の改革がスタートした1787年に就任したとされている。